

『食卓よ食事の準備, 金貨ロバ, 棍棒よ袋から出ろ』(KHM 36) の深層心理学的解釈

—— 健全な社会の倫理的支柱としての「棍棒」——

梅 内 幸 信

1. 平気で嘘をつく雌ヤギ

世の中には、平気で嘘をつく人々がいる。また、平気で人を裏切る人々もいる。もし、心根の善い人々を騙し、その財産を奪ってしまう悪意の人々が処罰されないとすれば、社会の秩序は失われ、その社会は早晚崩壊してしまうであろう。このことは、国家にも同様に当てはまる。法治国家において罪を犯した人々は、それ相応の処罰を受けなければならない。加害者への処罰が軽く行なわれ、被害者の恨みが十分に慰められないとすれば、加害者たちの抱く怨恨が法の精神を蝕み、そこから巨大ダムのごとき国家秩序にも亀裂が入り、やがてそれが国家全体を崩壊させる原因ともなるであろう。この意味において、法の精神は護られねばならない。倫理に悖る欲望にまみれた男が、痛快に処罰される話が、『グリム童話集』に収められている。それは、次のような『食卓よ食事の準備, 金貨ロバ, 棍棒よ袋から出ろ』(KHM 36) という話である。¹ ここには、古代からの民族の智慧が秘められている。

年取った仕立屋が、3人の息子に家で飼っている雌ヤギに毎日草を食べさせる仕事を課している。長男が「おいしい草の生えている墓地」(S. 195) に連れて行って、その雌ヤギに十分に草を食べさせ、夕方になって、長男が雌ヤギに満腹したかと尋ねると、雌ヤギは次のように答える。

「もう、おなかいっぱいだよ、
もう葉っぱ一枚入らないよ、メーメー！」(S. 195)

しかし、家に帰って、父親が雌ヤギに餌を食べたかと訊くと、次のように雌ヤギはまったく反対のことを答える。

「おなかいっぱいだなんて、なにを言ってるんだい？
わたしゃ、ちっちゃな溝を飛び越えただけさ、
葉っぱ一枚だってなかったね。メーメー！」

この雌ヤギの答えを聞くと、父親は息子を「嘘つき」(S. 196) と罵り、長男を「物差しでなぐって」

¹ Vgl. Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*. 3 Bde. Band 2. Stuttgart (Reclam) 1980, S. 195-205. 以下、この童話からの引用については、この版に従い、本文引用末尾にページ数のみ付す。訳は筆者による。なお、翻訳に際しては、次の翻訳を参考にさせて頂いた。『完訳 グリム童話集』(全7巻)、野村滋訳、筑摩書房、1999年、第2巻、131-153ページ参照。なお、この童話のタイトルはかなり長いので、本稿では『食卓よ食事の準備』と簡略化して表記する。

(S. 196), 家から追い出してしまふ。次の日は、次男にその順番が回ってくる。次男は、「庭の生け垣のそばに、まちがいなくおいしい草の生えている場所を探し出して」(S. 196), 雌ヤギに草を食べさせる。しかし、家に帰ると次男も、長男と同様、雌ヤギの嘘によってひどい目に会う。三男もまた、事情は同じである。年取った仕立屋は、とうとう家で独りきりになり、最後には自分で雌ヤギに草を食べさせに出かけざるをえなくなる。ところが、この仕立屋自身も、3人の息子たちと同じ目に会うこととなるのである。ここに至って仕立屋は、自分が3人の息子たちにした仕打ちの非を悟り、雌ヤギに次のような罰を加える。

仕立屋は、すばやく駆け上がって、自分のひげそり用カミソリを取ってくると、ヤギの頭に石けんをぬり、自分の手のひらと同じように、頭の毛をツルツルにそってしまいました。それから、物差しではもったいないと思いましたので、むちを取ってきて、ヤギをこっぴどくひっぱたきましたので、ヤギはピョンピョン飛びはねて、逃げ去ってしまいました。(S. 197)

しかしながら、この年取った仕立屋は、自分の過ちにもかかわらず、息子たちのように物差しで叩かれることはないのである。この父親の判断の過ちは処罰されず、父親は自分に向けられるべき怒りを雌ヤギに向ける。この父親の描かれ方から判断しても、横暴な家父長的態度の一端が看取されるであろう。

それにしても、雌ヤギは、腹一杯草を食べたのに、家に帰ると、なぜ葉っぱ一枚も食べてないというような嘘をつくのであろうか？ 三度も平然として嘘をつく雌ヤギの態度を観察すると、徐々に雌ヤギは、決して嘘などつくつもりなどなく、本当に満腹感を抱いていない可能性もあるのではという疑念が浮上してくる。つまり雌ヤギが、例えば過食症²の患者のように、途轍もなく貪欲であるとも考えられる。そうだとすれば、欲望によって雌ヤギの実体が異常に膨張し、その存在内部に空洞が生じ、やがてそれが虚無に変わるとき、雌ヤギは存在自体の虚無化を防ぐべく、なんとかその虚無を虚像によって満たそうとする。しかし、虚像には実質が無い。このことによって雌ヤギの存在は、虚像に満ちた虚栄によって支配されることになる。³ そうなると雌ヤギは、いくら胃袋が満たされても、心の中では絶えず飢餓感を覚える羽目となる。これは病的な状態であり、この種の病気を持つ人間は、傍目には貪欲で、邪悪な人間と映らざるを得ない。この貪欲・邪悪な人間という者は、次のように周囲の人々に悪影響を及ぼさずにはおらないのである。

邪悪な人間は、自責の念——つまり、自分の罪、不当性、欠陥にたいする苦痛を伴った認識——に苦しむことを拒否し、投影や罪の転嫁によって自分の苦痛を他人に負わせる。自分自身が苦しむかわりに、他人を苦しめるのである。彼らは苦痛を引き起こす。邪悪な人間は、自分

² いくら食べても満腹感を得られず、胃が満杯になると、胃の内容物を吐き出して、また食べる患者もいると言われる。これは、器質的病というよりは、精神的な病である。

³ この状態は、M. エンデの『はてしない物語』の主人公パスチアンが、ファンタジーエン国で体験した「元帝王たちの都」での状況と似ている（エンデ、ミヒヤエル『はてしない物語』上田真而子／佐藤真理子訳、岩波書店、1991年、参照）。

の支配下にある人間にたいして、病める社会の縮図を与えている者である。⁴

このように雌ヤギは、単に動物として登場しているだけではなく、なにかしら寓意を帯びた存在のように思われてならない。この点は、後ほど詳しく考察の対象としたい。

2. 『食卓よ食事の準備』の類話

レクラム版第3巻に掲載されている注釈によると、『食卓よ食事の準備』（第7版）は、1812年の初版第1巻においてすでに第36番目の話として収録されていた。この話は、「ヘンシエル近郊の老シュトルヒ嬢」の物語に基づいて、ヘッセン地方のカッセルにおけるジャンネット・ハッセンプフルーク (Jeanette Hassenpflug) によって語られたものであると言われる。⁵『グリム童話集』初版に拠れば、そこには『<食卓よ食事の準備、金貨ロバ、棍棒よ袋から出ろ>のお話』(Von dem Tischgen deck dich, dem Goldesel und dem Knüppel in dem Sack) と題して、最終第7版に掲載されたものと同様な話が収録されている。⁶これと同時に、もう1つの類話が掲載されている。この類話は、ドルトヒェン・ヴィルトが1811年10月1日に語ったものである。⁷最初の話とその類話は、比較・考察すれば、非常に興味深い結果が得られると思われる。そこで、最初の話は、すでに訳出されて公になっているので、未訳の類話の方を訳出して、今後のグリム童話研究の資料として脚注に掲載する。⁸

⁴ ベック, M. スコット『平気ですそをつく人たち』森英明訳, 草思社, 1998年, 172ページ。

⁵ Vgl. Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*, a. a. O., Band 3, S. 457.

⁶ Vgl. Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*. Gesammelt durch die Brüder Grimm. Vergrößerter Nachdruck der zweibändigen Erstausgabe von 1812 und 1815 nach dem Handexemplar des Brüder Grimm-Museums Kassel mit sämtlichen handschriftlichen Korrekturen und Nachträgen der Brüder Grimm, sowie einem Ergänzungsheft: Transkriptionen und Kommentare in Verbindung mit Ulrike Marquardt von Heinz Rölleke. Göttingen (Vandenhoeck & Ruprecht) 1996, Band 1, S. 161-171. なお、この類話は、ボルテポとリーフカによる『グリム童話集注釈』にも掲載されている (Vgl. Johannes Bolte / Georg Polivka: *Anmerkungen zu den Kinder- und Hausmärchen der Brüder Grimm*. 4 Bde. Hildesheim-New York [Georg Olms Verlag] 1982, 1. Bd., S. 346-361)。

⁷ Vgl. Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*, a. a. O., Band 3, S. 457.

⁸ <ある1人の仕立屋に3人の息子がいたが、この仕立屋は、息子たちになまっとうな手仕事を学ばせようと、次々と世の中へ送りだそうと思いました。息子たちが手ぶらで旅に出ることがないように、それぞれの息子たちにパンケーキと銅貨一枚を持たせて旅に出しました。長男は、旅に出て、クルミの殻に住む小人の所にやって来ましたが、しかしこの小人は、途方もない大金持ちでした。小人は、仕立屋に言った、「もし、おまえがわしの家畜の群れに山の辺りで草を食べさせ、見張ってくれたら、おまえに素晴らしい贈り物をあげよう。しかしおまえは、山のふもとにある一軒の家に注意しなくてはならぬ。そこはにぎやかで、いつでも音楽が聞こえ、踊りの叫び声が聞こえるんじや。いったん、その中へ入ったら、もうわしらの関係はお仕舞いじゃよ。」仕立屋は、これを了承し、家畜の群れを山へ連れて行き、家畜の群れを熱心に世話しましたが、いつでも例の家からは離れた所に留まっておりました。しかし、ある日曜日に仕立屋は、その家の中からとても楽しそうな音楽が聞こえて来たので、「一回ぐらいなら、数に入らないや」と考え、中に入り、踊って愉快に過ごしました。しかし、仕立屋が家から出て見ると、外は真っ暗の夜中で、家畜の群れは全部いなくなっておりました。そこで仕立屋は、心も重く、ご主人さまの所に帰って、自分のしたことをご主人さまに打ち明けました。クルミの殻の中のご主人さまは、ものすごく腹を立てました。けれども、仕立屋が非常に長いこと自分の勤めをきちんと果たし、また自分の過ちを隠し隔て無く告白しましたので、ご主人さまは、仕立屋に「食卓よ、食事の用意」を贈りました。仕立屋は、それに心から満足し、父親の元へと帰路に着きました。旅の途上、仕立屋は、とある宿屋に泊まりましたが、そこで長男は、宿屋の主(あるじ)に特別な部屋を提供してもらいましたが、食事は無用と言って、部屋に閉じこもりました。宿屋の主は、「この奇妙な客は、いったい何をしようとしているんだ」と考え、忍び足で二階へ上がり、鍵穴から中を覗き込みました。すると宿屋の主は、その見知らぬ客が、小さな食卓を自分の前に置いて、「食卓よ、食事の用意！」と言うと、たちまち最高の食事と飲み物が食卓の上に並ぶのを見ました。宿屋の主は、その食卓は自分にもっとふさわしかるかと考えて、同じような外見の食卓を据えて置きました。朝に仕立屋は、出発し、そのすり替えに気づきませんでした。仕立屋が家に帰って来ると、長男は父親に自分の幸運について話しました。父親は、嬉しくなって、早速その魔法の食卓を試しましたが、しかし、「食卓よ、食事の用意！」と何度言っても、無駄で、食卓は空っぽのままでしたから、今にして若い仕立屋は、食卓が盗まれてしまったことを悟りました。

そこで二番目の息子がパンケーキと銅貨1枚もらって、世の中に出て、長男より上手にやろうと思いました。この次男もまた、クルミの殻に住むご主人さまに長いこと忠実に仕えました。しかし最後に、次男は、約束を破って、例の家に入り、愉快に過ごし、踊り明かして家畜の群れを失くしてしまいました。(350ページ)そこで次男は、いとまごいをしなければなりません。しかし、ご主人さまは、「揺すって、振って、金貨を後ろから前から降らせ！」と言えば、金貨が後ろから前から

次に、『食卓よ食事の準備』とその類話を、物語の展開の主要事項に関して比較・考察を試みよう。ただしここでは、初版における『食卓よ食事の準備』ではなく、最終の第7版におけるそれと、初版におけるその類話を対象とする。というのも、第7版における物語の方が、細部において文体上完成されているからである。⁹両者の比較・考察より、以下のような結果が得られる。

項目	話	『食卓よ食事の準備』 (第7版; A)	その類話 (初版; B)	備 考
1. 父親の職業		仕立屋。	仕立屋。	Aは、初版第1巻において「靴屋」。
2. 長男の職業		指物師。	仕立屋。	
3. 長男の魔法の品		「食卓よ食事の準備」。	「食卓よ食事の準備」。	
4. 次男の職業		粉屋。	仕立屋。	
5. 次男の魔法の品		「金貨ロバ」。	「金貨ロバ」。	
6. 三男の職業		ろくろ細工師。	仕立屋。	
7. 三男の魔法の品		「棍棒よ袋から出る」。	「棍棒よリュックサックから出る」。	Bでは袋ではなく、リュックサック(背囊)。
8. 魔法の品を与える人物		それぞれの仕事の親方。	「クルミの殻に住む小人」。	
9. 息子たちの修行内容		それぞれの仕事を誠実に学ぶこと。	ご主人さまの「クルミの殻に住む小人」に仕えて、家畜の群れの世話をする事。	
10. 難題		宿屋の主に騙されないこと。	歓楽の家に誘い込まれないこと。	共に、三男だけが克服する。
11. 雌ヤギの登場		有。	無。	

雨あられと降り注ぐロバを次男に贈りました。仕立屋は、満足して、家に向かいましたが、しかし、宿屋に入ると宿屋の主は、そのロバを普通のロバと換えてしまいましたので、家に帰って、父親をお金持ちにしようとしたとき、失敗に終わり、幸運を取り逃がしてしまいました。

ついに三番目の息子がパンケーキと銅貨1枚をもらって、世の中に送り出されましたが、この三男は、クルミの殻の中に住むご主人さまに誠実に仕えましたが、例の危険な家に誘い込まれないように、耳に綿栓を詰め込みました。こうして一年が過ぎ、三男は、ご主人さまに家畜の群れを傷つかずに全部お返しし、一匹たりとも減っておりませんでした。そこで、ご主人さまは、言いました、「わしは、おまえに特別なご褒美をあげねばな。おまえにやるリュックサックの中にはな、棍棒が入っておる。おまえが、<棍棒よ、リュックサックから出る!>と言えば、棍棒はリュックサックから飛び出して、人々を徹底的に懲らしめてくれるのじゃ。」仕立屋は、それをもらって、帰路の途上で、二人のお兄さんから贈り物を奪った宿屋の主の所に泊まりました。三男は、リュックサックを食卓の上に投げ置くと、自分のお兄さんたちについて話し始めました。「1人のお兄さんはく食卓よ、食事の用意>を持っていて、もう1人のお兄さんは、金貨ロバを連れて来ました。どれもみんな実に素晴らしいのですが、でも、ほかがこのリュックサックの中に持っている物に比べたら、くずみたいな物ですよ。この世のだれ1人として、これを買取ることなどできっこありませんよ。」宿屋の主は、好奇心に駆られ、その宝も、ついでにまた欲しくなっていました。夜になったとき、仕立屋は、麦わらの上に横になり、リュックサックを頭の下に置きました。宿屋の主は、起きて、仕立屋がぐっすり眠り込んだと思われる頃まで待っておりました。やがて宿屋の主は動き出し、もう1つ別のリュックサックを持って来て、仕立屋がその頭の下にあるリュックサックと取り換えようと思いました。しかし、仕立屋は、目を醒ましていて、宿屋の主の手が近づいて来たのに気づくと、叫びました、「棍棒よ、リュックサックから出る!」すると、棍棒が飛び出て宿屋の主を懲らしめたので、宿屋の主は、ひざまずき、「ご勘弁を!」と叫びました。しかし仕立屋は、この棍棒が「食卓よ、食事の用意」と金貨ロバを差し出すまでは、棍棒を休ませませんでした。こうして仕立て屋は、3つの魔法の品を持って家に帰り、そしてこの後、父親と3人の息子たちは、裕福で、幸せな生活を送りました。すると父親は、「わしのあげたパンケーキと銅貨1枚は、無駄には終わらなかつたわい」と言いましたとさ。>『ベスト・セレクション 初版グリム童話集』吉原高志・吉原素子編訳、白水社、1998年、121-136ページ参照。

⁹ 初版と第7版における物語を比較してみると、vorzeiten, einmal といった副詞が加えられたり、文が短く区切られたり等の変更有るだけで、物語全体の筋は、両者ともほぼ同じである。

第7版における『食卓よ食事の準備』と初版における類話を比較・考察してみて、判明する大きな相違は、次の3点である。

1. 第7版における話では、父親は仕立屋、長男は指物師、次男は粉屋、三男はろくろ師という具合に、全員が違う仕事に就くのに反し、初版における類話では、全員が仕立屋という職業を持っている。
2. 初版における類話では、全員が「クルミの殻に住む小人」に仕え、家畜の群れの世話をする。この際、長男と次男は、歓楽の家に誘い込まれるが、三男だけは、耳に綿栓を詰めて、誘惑を回避できる。
3. 雌ヤギの登場の有無。第7版における話で雌ヤギは登場するが、初版における類話では雌ヤギは登場しない。

第1の相違から判明することは、この類話の方が第7版の話より古い起源を持つ話であると推測されるということである。基本的に物語は、単純な筋立てから複雑な筋立てへと変貌して行くのが常である。加えるに、父親が仕立屋で、長男、次男、三男が続けて仕立屋になろうとして家を出たという筋立ては、まさしく父親と3人の息子たちの間に、エディプス・コンプレックスが存在していたということを裏づけている。3人の息子たちは、思春期に当たって父親にエディプス・コンプレックスを覚え、仕立屋の仕事を父親から学ぼうとは思わない。息子たちは、別の親方から仕立屋の仕事を学ぼうとして、家を出る。それでなくともこの父親は、とりわけ第7版の話において、家父長的な雰囲気を漂わせている。父親が雌ヤギに草を食べさせる仕事を息子たちに課し、息子たちが真面目に雌ヤギに草を食べさせたにもかかわらず、雌ヤギの嘘を見破られず、雌ヤギの言い分のみを認め、3人の息子たちを家から叩き出している態度が、その証左である。とはいえ、この父親と3人の息子たちの間に生ずるコンプレックスは、ギリシャ悲劇『オイディプス王』のように、息子オイディプスが父王を殺害するほどまでに大きくはない。というのも、この仕立屋の家庭には、息子たちが父親を嫉妬するような母親の存在が欠如しているからである。

第7版における物語で3人の息子たちは、父親の職業とは別の職業に就こうとしている。つまり、長男は指物師、次男は粉屋、三男はろくろ師になろうとしている。このように、3人の息子たちが社会に出て、それぞれ別の職業に就こうとする設定の方が、社会の多様性を示す上では一層効果的であると思われる。物語も、社会の歴史的発展と歩調を合わせて展開していると考えられる。初版における類話では、息子たち全員が「クルミの殻に住む小人」に仕え、家畜の群れの世話をする。この際、長男と次男は、ご主人さまであるクルミの殻に住む小人の忠告にもかかわらず、歓楽の家に誘い込まれるが、『黄金の鳥』(KHM 57)におけるように、三男だけは耳に綿栓を詰めることによって、誘惑を回避できる。¹⁰ ここで看取される少々奇妙な物語の展開は、長男と次男がご主人さまの忠告に従わずに、歓楽の家に誘い込まれて、その挙げ句家畜の群れを一部失くしたにもかかわらず、自分の過ちを正直にご主人さまに打ち明けたという理由で、それぞれ「食卓よ食事の準備」と「金

¹⁰ 拙著『童話を読み解く』同友社、2001年、419-439ページ参照。

貨ロバ」を贈られることである。通常、グリム童話では、禁止事項は破られるが、しかし禁止事項を破った者には、試練が課される。¹¹ この点を考慮に入れば、当該類話で、長男と次男が課される試練とは、泊まった宿屋でこれらの魔法の品を奪われてしまい、父親の家に帰って、親戚や友人たちの前で恥をかかせられたことぐらいである。この物語の展開には、若干説得力が欠如していると言わざるを得ない。従って、グリム兄弟が最終の第7版にこの類話におけるこのエピソードを組み込まなかったのも理解される。その代わりに、「平気で嘘をつく雌ヤギのエピソード」を組み込んだという仮説も立てられるかも知れない。しかし、このエピソードが『食卓よ食事の準備』において持つ役割の特定を試みるためには、もう少し予備考察が必要であると思われる。

ただし、この段階でもう1つ確認しておかなくてはならない事項がある。それは、初版の類話において、本来の主人公であり、ご主人さまの忠告に従い、世話をしている家畜を一匹たりとも失わなかった三男が褒美としてもらう物が、「棍棒」だという設定である。この棍棒は、途方もなく金持ちのクルミの殻に住むご主人さまから長男に贈られる「食卓よ食事の準備」と、次男に贈られる「金貨ロバ」に比べると、いかにも貧相だという印象を与える。しかしながら、物語の展開からすれば、この棍棒が一番価値のある物だということは疑い得ない。それでは、いかなる点においてこの棍棒は、「食卓よ食事の準備」と「金貨ロバ」よりも価値があるのであろうか。このことが、さらなる説得力をもって解釈されねばならないであろう。

3. 人生の課題

家父長的な父親に追い出された3人の息子たちは、生活の糧を求め、それぞれ「指物師」「粉屋」「ろくろ師」の所に見習いとして入る。長男は「熱心に根気強く仕事を習い」（S. 199）、次男は仕事を「立派につとめ上げ」（S. 200）、そして三男も仕事を「とても立派につとめあげ」（S. 202）た。そこで、親方から長男は「食卓よ、食事の準備！」（S. 198）と叫ぶと、あらゆる料理と飲み物が即時に出て来る魔法の食卓を、次男は「ブリックレーブリット」と呪文を唱えると、口からも尻からも金貨を吐き出すロバを、三男は「棍棒よ、袋から出ろ！」と言うと、自分に危害を加えようとしている者を叩きのめす棍棒をもらう。ところが、長男と次男が泊まった貪欲な宿屋の主は、魔法の食卓をそっくりの古い食卓とすり替え、金貨ロバを別のロバとすり替えてしまうのである。

長男が食卓を父親の家に持ち帰り、親戚や友だちを招待してご馳走してやろうとすると、偽の食卓は料理を出してくれないゆえに、長男は嘘つきだと見なされてしまう。次男も同様に、金貨ロバが金貨出してくれないゆえに、親戚や友だちに嘘つき呼ばわりされる。しかし三男は、長男と次男の失敗を聞き及んでいたので、棍棒を宿屋の主に盗まれることを警戒し、見事兄弟の仇を討ち、長男の魔法の食卓と次男の金貨ロバを取り戻すことができる。こうして、三男の活躍で一家は、「楽しく、豊かな生活を」（S. 295）送るのである。

この童話では、三男の働きによって長男の魔法の食卓と次男の金貨ロバが取り戻される。三男が棍棒によって貪欲な宿屋の主から魔法の食卓と金貨ロバが取り戻されなければ、この童話の結末は、間違いなくハッピー・エンドとはならなかったはずである。この棍棒のイメージとシンボルは、言

¹¹ 同書、49-78ページ参照。

うまでもなく、「正義と秩序を回復する物」である。¹² 3人の息子たちは、父親に家から叩き出され、生活の糧を求めて、それぞれの職に就いている。そこで長男と次男は、仕事を立派に勤め上げて、魔法の食卓と金貨ロバを親方からもらう。魔法の食卓を所持する者は、食べることに不自由しない。つまり、生活の糧に困ることはないのである。また、金貨ロバを所有する者は、お金を使い放題にできるのであるから、「食」ばかりではなく、「衣住」にも困ることはない。

同じことは、イメージとシンボルの解釈から見ても言える。長男は「指物師（大工）」に、次男は「粉屋」に、三男は「ろくろ細工師（陶器職人）」になる。長男の職業である指物師は、「創造主」（IS 430ページ）というイメージを持っている。確かに、大工も一種の創造者であり、人間の生活に不可欠な三大要素である「衣食住」のうちの「住」を代表している。次男の職業である粉屋は、「食欲」（IS 430ページ）のイメージを持っている。しかしながら、人間だれしも、ショーペンハウアーの提示する第一の人生の課題である「生活の糧を得る」ためには、ある程度食欲であらざるを得ない。次男のもらう金貨ロバは、一般に人間はお金があれば、「衣食」に事欠くことは無いであろうから、「住」はもちろんのこと、とりわけ「衣食」の満足を示唆している。最後に三男の職業であるろくろ細工師（陶器職人）は、「廻転する天球」（IS108ページ）を象徴的に示している。これは「コスモス」（Kosmos）¹³と同様、「秩序」のイメージを具えている。三男がもらう宝である棍棒は、「懲罰」のシンボル（IS133-134ページ）であるが、これは人間の生活に不可欠な三大要素である「衣食住」に含まれてはいない。しかしながらこれは、むしろこの「衣食住」を支える基盤ないし大前提と見なすことができるであろう。

ところで、ショーペンハウアーは、人生第一の課題として、「生活の糧を手に入れること」を挙げている。これは、特段の説明も要しないであろう。ところが、次に彼が挙げている第二の課題は、「退屈から逃れること」である。この課題は、やや意外性を帯びている。衣食住に足りると、今度はその人間が退屈が襲うというのである。¹⁴ 退屈になると人間は、往々にして不善をなす。大多数の人間は、小人であるから、閑居してたやすく不善をなす。この様子は、E. T. A. ホフマンの『ブランビラ王女』に登場する主人公たち、すなわちジアチンタとジッリオの行動様式を考察すれば、十分に理解される。

退屈は、人生が欲望と幻影によって揺り動かされるところから生じ、退屈を逃れようとして欲望と幻影を克服すると、今度は「現存在のまったき不毛と空しさ」¹⁵が現れるというわけである。ジアチンタとジッリオが直面している状況は、まさにこれと同じものである。彼ら2人は、不満と退屈、そして、誇大妄想と虚栄心に捕われてしまい、彼らの欲望から立ち昇る夢像は、デモーニッシュな原理に支配されたために、人間存在を呪縛する「夜の夢像」（S. 219）となってしまっている。この夜の夢像は、彼らの内面世界を侵食し、さらに、外面世界にも悪しき影響を及ぼし始めることによって、現実の世界は彼らにとって仮象の世界へと変貌しつつある。仮象の世界は実体のない世界

¹² フリース、アト・ド『イメージ・シンボル事典』山下圭一郎他訳、大修館書店、1988年、133-134ページ参照。以下、この事典からの引用については、ISと略記し、本文引用末尾にページ数のみを付す。

¹³ Vgl. *Etymologisches Wörterbuch des Deutschen*. Berlin (Akademie-Verlag) 1989. 3 Bde. H-P, 916f.

¹⁴ Vgl. Schopenhauer, A.: *Werke in zehn Bänden*. Band IX. Zürich (Diogenes) 1977, S. 311.

¹⁵ Ebenda.

であるからして、そこにおいて彼らが自己を実現することはまず不可能である。

それでは一体どのようにしたら、ジアチンタとジッリオは自己を正しく認識し、自己を実現できるのであろうか。この問題を解く鍵をショーペンハウアーは、2つ提出していると考えられる。第一には理想の設定であり、第二には人生を外側から客観的に観察することを可能にする純粋に知的な作業である。¹⁶ ショーペンハウアーがここで提出している2つの鍵は、自己認識と自己同一性の確立（自己実現）という問題を解くそれぞれ別個の鍵ではなく、問題の解決に到達する連続した2つの段階を示唆しているように思われてならない。すなわち、第一段階として理想を設定し、次に第二段階として、理想を実現するために純粋に知的な作業をすることによって、自己認識と自己同一性の確立に到達できると解釈されるのである。¹⁷ とはいえ、退屈という人生の罠に陥らないように、理想を設定し、理想を実現するために知的な作業をすることは、大半の人間にはかなりの難題となるであろう。

4. 種々の疑問点

童話の展開そのもの、つまり長男の魔法の食卓と次男の金貨ロバが貪欲な宿屋の主に盗まれ、それを三男が棍棒の力を借りて取り戻し、3人の息子たちが家へ帰り、父親と子ども幸せに暮らすという筋立ては、大人にも子どもにも親しみやすいものである。しかし、考察を深めてみると、種々疑問が湧いてくることも確かである。例えば、次のような疑問である。

1. 真面目に見習いを勤め上げたとはいえ、3人の息子たちは、なぜ親方から相当に価値のある魔法の食卓や金貨ロバ、棍棒をもらうのか。
2. 家父長的な父親に厳しく育て上げられたにも関わらず、なぜ3人の息子たちは、ファーザー・コンプレックスに陥らず、真面目で、父親孝行をする良い人間になったのか。
3. 嘘を平気でつく雌ヤギは、父親によって頭の毛をツルツルに剃られ、鞭でもってひどく打たれ、物語の末尾ではキツネの穴の中でミツバチによって強烈に刺されるのだが、この雌ヤギは、この童話においてどのような役割を果たしているのか。
4. 棍棒が正義・秩序を回復することは望ましいが、果たして所有者が、欲望に支配されることによって乱用される可能性はないのか。

1, 2, 3の疑問は、すべて「平気で嘘をつく雌ヤギのエピソード」と関連しているように思われてならない。というのも、家父長的な父親が、当初は雌ヤギの言い分のみを信じ、自分の息子たちの言い分は信ぜず、息子たちを家から叩き出してしまうからである。このような父親を恨みこそすれ、息子たちは一人前になってからも、自分の勝ち得た宝を父親の家へ持ち帰るであろうか？ この疑問解明は、かなり難しいもののように思われる。しかし、「宝を家へ持ち帰る」点を考慮に入れるとき、『ヘンゼルとグレーテル』が想起されるが、実際これが重要な糸口であると考えられる

¹⁶ Vgl. ebenda : S. 311f.

¹⁷ 拙著『悪魔の霊液』同学社、1997年、299-306ページ参照。

のである。ヘンゼルとグレーテルは、大飢饉の折り、口減らしのために、継母と木こりの父親によって森の奥へ連れて行かれ、置き去りにされる。そのため2人は、白い鳥に導かれて、さらに森の奥に進み、住む魔女の作ったお菓子の家に辿りつく。この人喰い魔女は、ヘンゼルをもう少し太らせてから食べようと、ヘンゼルを檻に入れ、グレーテルにご馳走を作らせ、ヘンゼルに食べさせることを命じる。しかし、森の中で試練を受けているうちに、か弱い女の子であったグレーテルは、勇気を持った少女に成長し、魔女をパン焼き窯に押し込んで殺してしまう。2人は自由になり、魔女の家に入って見ると、部屋の隅々には沢山の宝があった。これらの宝を出来るだけポケットやエプロンの中に詰め込んで、2人は家に帰る。すると、継母はすでに死んでいて、家にいるのは父親だけだった。父親は、初めから2人の子どもを森の奥に置き去りにすることには反対していた。2人を森の奥に置き去りにしてからも、絶えず2人の子どもたちを心配していたのだった。この点において父親は、継母よりも大きな愛情を2人の子どもたちに抱いていたということが分かる。¹⁸

魔女の作ったお菓子の家にあった宝とは、継母が子どもたちから奪った「子どもの特性を表すシンボル」であるという解釈が可能であった。この魔女のように、子どもの特性を殺して、奪ってしまう存在は、まさしくユングの提唱する「グレート・マザーの悪しき側面」であると言わざるを得ない。筆者は、グリム童話『赤ずきん』に関連して、以前この「グレート・マザーの悪しき側面」を考察した経験がある。この際、『赤ずきん』における狼の解釈に関して、フロイト派の解釈者とユング派の解釈者との間には、ここで大きな食い違いが出てきている。フロイト派の解釈者であるベッテルハイムは、狼を「父親の否定的・破壊的側面」と解釈しているが、これに反して、フロイト派の解釈者である河合隼雄氏は、「母親の元型像」と解釈している。¹⁹ ユング自身も、不登校に罹った11歳の少女の治療に当たって、その少女の夢の中で自分を食べてしまう狼を「母なるものの力」と解釈したと言われる。²⁰ この点は、精神分析と深層心理学を用いる解釈者たちの間でも、恐らく見解が分かれるところであろう。筆者は、この問題に関して、三つの理由によって、ベッテルハイムの見解を採用した。²¹

¹⁸ 拙論「まさされる寶子に如(し)かめやも——『ヘンゼルとグレーテル』(KHM 15)の深層心理学的解釈」, 鹿児島大学法文学部紀要「人文科学論集」第56号, 2002年, 21-52ページ参照。

¹⁹ 鈴木晶『グリム童話』講談社, 1991年, 92-93ページ参照。

²⁰ 南博編著『深層心理がわかる事典』日本実業出版社, 1997年, 138ページ参照。

²¹ 1. 狼は、森の中で赤ずきんと出会ったときに、次のように考えている。「若くて、やわらかそうな女の子だ。こりゃあ、おまえさんにとっちゃあ、[脂あぶらののつ]すごいごちそうだぞ。さあ、どうしたものかな、ごちそうにありつくためにはな。[こいつあ、ばばあよりもっとおいしそうだぞ。うまいことだまして、二人ともいただかなきゃならん]。」(Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*, a. a. O., Band 1, S. 134) この狼の魂胆から、かなり明確に、狼が祖母と赤ずきんを性的欲望の対象として捉えていることが読み取れる。この意味において、狼は、祖母と赤ずきんとは異なる性を持つもの、すなわち「男性」と把握する方が自然である。2. 狼に呑み込まれ、後に狩人によって狼の腹から救出される祖母と赤ずきんのうち、この再生によって赤ずきんが「お母かあさんがだめとおっしゃったら、これからは、二度と一人では森の中で、より道なんかしないわ。」(S. 136) という智恵を獲得している。この種の生産的な智恵の獲得は、一般に、弁証法的な発展において実現されるものである。このことを踏まえると、やはり狼と祖母・赤ずきんとは、対立原理のそれぞれの両極を成すものと考えざるをえない。対立原理においては、プラスとマイナス、N極とS極というように、対極的な二つの要素によって緊張関係が生み出されなければならない。女性的なもの同士は、プラス対プラス、あるいはマイナス対マイナスというように、反発し合うだけであって、そこから異質なものが統合される結果生ずる智恵は出てこないと思われる。赤ずきんは、異性(アンチテーゼ)によって呑み込まれ(死)、その後再生(ジンテーゼ)したと考える方が、矛盾が少ないと判断せざるをえない。3. 狼が「母親の元型像」であるとすれば、たとえ病んでいるとはいえ、祖母をも呑み込んでしまう行為が、説得力をもって説明されるとは思われない。祖母は、ユングの元型理論に照らしてみると、「グレート・マザー」に相当する。加えて、『赤ずきん』の中に登場する母親も、若干分別臭いという感はあるものの、抑圧されたアニムスのある程度克服して、グレート・マザーへの道を歩み始めているという印象を与える。この母親が、「母なるもの」の強大な力を揮って、祖母と赤ずきんを呑み込んでしまうという解釈には、やはりこの物語においては無理があると思われる。むしろ、この見解は、「魔女=母親の元型像」として、『ヘンゼルとグレー

このように、『食卓よ食事の準備』に登場する父親が『ヘンゼルとグレーテル』に登場する父親と似たような役割を果たしているとすれば、『食卓よ食事の準備』における3人の息子たちも、一人前になってから、宝を持って家に帰るという事態も、ここで特に「帰巢本能」を持ち出さなくとも、理解されることになる。ただし、家父長的時代における「故郷に錦を飾る」という男子の本懐は、加味しても差し支えないであろう。日本昔話における『桃太郎』も鬼ヶ島で発見した宝をお爺さんとお婆さんの元へ持ち帰っているのである。²²

このような考察を踏まえて、『食卓よ食事の準備』における継母のイメージを模索してみると、この童話に登場する雌ヤギが継母ないし魔女の役割を果たしているのではないかという仮説が立てられるように思われる。

5. 筋の二重性

『食卓よ食事の準備』における「雌ヤギの話」は、初版では組み込まれていなかった。初版における物語は、父親と立身出世を目指す3人の息子たちの物語であった。それにしても、息子たちに腹一杯草を食べさせてもらったにも拘わらず、父親の前では嘘をつく雌ヤギの話が、なぜ7版の『食卓よ食事の準備』の冒頭と末尾に配置されたのであろうか？ この疑問は、まず雌ヤギの持つイメージを探求することによって、解明の糸口が見つかると思われる。

「雌ヤギ」は、『イメージ・シンボル事典』によれば、「気まぐれ、放浪癖、欲情」を表している (IS 284-286)。それは、その他にも「貧困」「愚鈍」のイメージを持っている (IS 286)。雌ヤギは、まずは「気まぐれ」である。というのも、父親を初め、3人の息子たちに大切にされ、美味しそうな草を食べさせてもらっているのに、草を満腹に食べた後で、その飼い主たちに平気で嘘をつく。雌ヤギには、感謝の念が無い。動物であるから仕方が無いと見なす読者もいるかも知れない。しかし、これが「夫を初めとし、3人の息子たちから愛情を奪うだけで、少しの愛情も返さず、平気で嘘をつき、放浪癖があり、欲情に駆り立てられ、不貞を働く女」のシンボルであるとすれば、このような女は、人間の姿で描くよりも、ヤギの姿で描いた方が、寓意としてはるかに適切だということになる。本来的にこの種の女は、退屈に舐まれた小人であり、ショーペンハウアーの主張における理想の設定や知的遊戯の才能を持ち合わせていない。痛い目に遭わなければ、なにも悟ることがないのである。実際、この雌ヤギは、嘘をついたことによって父親によって、カミソリで「頭の毛をツルツルに」剃られ、鞭でもって「こっぴどく」(S. 197) ひっぱたかれてしまうのである。

この後、雌ヤギは、キツネの穴倉へ逃げ込む。すると、雌ヤギよりも一般に強いと思われるキツネもクマもキツネの暗い穴倉にいる雌ヤギの「燃えるような目でギョロギョロ」(S. 295) にらむ姿に怖れをなして、逃げる有様である。この外面は、容易に「外面如菩薩、内面如夜叉」という、女性の本性を捉えたお釈迦さまの言葉を想起させる。時として、女性の中には、この雌ヤギのように、家庭の外では理想的な母親を演じるが、一旦家庭内に戻ると、家族全員に甘えて、途方もなく身勝手な振る舞いをしてしまう女性がいる。外界であまりにも理想的な母親を演じ過ぎたため、そ

テル』に適用した方が、一層整合性を持つと考えられる。

²² 柳田國男『桃太郎の誕生』三省堂、1933(昭和8)年、参照。

の反動で抑圧された心的エネルギーが内界で爆発してしまうのである。

動物界に登場して、雌ヤギの禿げた額をこっぴどく刺して懲らしめるのは、通常キツネやクマより弱い昆虫だと見なされる小さなミツバチである。ここでも、童話特有の「非日常世界の価値観」が見られる。例えば、『黄金の鳥』における主人公の三番目の王子は、黄金の鳥を捕えるために旅に出て、その途上三度もキツネによって命を助けられる。そのお礼にこのキツネは、自分を鉄砲で撃って殺し、四肢をバラバラにして欲しいと三番目の王子に頼む。この王子は、当初自分の恩人を撃ち殺して、四肢をバラバラにすることなど到底できないと拒絶する。しかし、この後、自分の2人の兄たちに殺されかけるという「死と再生」を体験すると、王子はキツネが自分に頼むことの意味を理解できるようになるのである。

キツネは智慧を持っているが、その智慧はもっぱら無意識の世界から来る。キツネは、王子に何度も王子に助言を与えるばかりではなく、王子を城に連れて行ったり、大きな山を難なく取り除けたり、王子を井戸から救い出したりする。このようなキツネの力は、無意識の世界から来るものと考えざるをえない。実際、無意識の世界には無尽蔵とも思われる心的エネルギーが貯蔵されている。しかしながら、このエネルギーは、人間がそれを無意識の世界から取り出す方法を知らなければ、ただ無意識の世界に閉じ込められて、ときとして人間にデモーニッシュな力を揮うだけに過ぎない。ただし、その方法は、やはり単純なものではない。ある程度無意識の世界に通じた者でなければ、その方法を身に付けることはできない。それゆえ、キツネはこの方法を根気よく王子に伝授しようと試みているのである。その方法を身に付けるためには、まず、価値観の転換を図ることができなければならない。つまり、意識と日常の世界から脱して、無意識と非日常の世界の論理に慣れなければならない。次に、この過程の最終段階においては、「死と再生」を理解しなければならないのである。王子は、2人の兄によって井戸に突き落とされ、そこで「死と再生」を体験したのであった。この認識を体得できたからこそ、王子は最後にはついにキツネを射ち殺して、首と両手両足をばらばらにできたのであった。この行為は、決して相手を殺すものではなく、逆に、再生を前提とする、死による生の止揚なのである。キツネは、まさしくこの「死と再生」を願ったのであった。このキツネが智慧のシンボルであり、その智慧がまた、無意識の世界から来るものであることを踏まえれば、その首と両手両足をばらばらにする行為は、「無意識のものを解釈によって意識化する」行為であると推定される。²³

このように、小さなミツバチがキツネやクマが怖れる雌ヤギを懲らしめることができるという事態は、日常的価値観からは理解され得ない。それは、その対極にある非日常世界の価値観からでなければ理解困難なものである。そして、非日常世界の論理を理解できるということは、無意識の世界に通じていることを意味している。人間界から動物界へと逃れた「平気で嘘をつく雌ヤギ」は、動物の中では小さなミツバチによって懲らしめられる。他方、人間界では、宿屋の主、すなわち「人を騙し、その宝を奪う者」は、棍棒によって叩きのめされるのである。この棍棒は、『食卓よ食事の準備』という物語の展開からも十分に推測されるように、「懲罰に用いる典型的な道具」(IS 133-134)である。また、この懲罰の道具をギリシャの太陽英雄ヘラクレス、ヘルメス、テセウスが武器

²³ 拙著『童話を読み解く』、前掲書、438-439ページ参照。

として用いたと言われる（IS 134）。

このように、一見すると、雌ヤギの懲罰と宿屋の主の懲罰は、無関係のように見えるが、実は鏡の表裏、また人間の意識と無意識のように、対置されている。ここでは、動物界と人間界が対置されている。その接点は、継母ないし魔女の寓意と見なされる雌ヤギである。この二重構造は、「勸善懲悪の精神」が人間界においてばかりではなく、動物界においても支配していることを示すために、用いられていると考えられる。このことは、次の比較表からも端的に判明すると思われる。

物語の二重構造

基準 \ 筋	雌ヤギ (動物界)	宿屋の主 (人間界)	備考
1. 貪欲	○	○	動物にも人間にも該当する。
2. 具体的行動	嘘をつく。	他人の宝を奪う。	
3. 懲罰	仕立屋によって頭の毛をツルツルに剃られる。鞭で叩かれる。	棍棒で叩かれる。	
4. 性別	女。	男。	対置されている。
5. 末路	ミツバチによって頭を刺され、飼い主を求めて人々の元へ赴く。	奪った宝を全部返還する。	
6. 寓意	家族の愛情を奪う母親。	人々の富を搾取する商人。	家庭と社会の対置。
7. 他者依存性	○	○	自らは生産性無し。

注) ○は、当該項目が当てはまることを示す。

以上の分析と考察によって、寓意による雌ヤギの話と童話の論理に基づいて語られる話が、相互に反射し合い、そこから勸善懲悪の精神が強力なコントラストによって照射される仕組みになっていることが判明する。

6. 健全な社会の倫理的支柱としての「勸善懲悪の精神」

平成24年から25年にかけて、日本ではオリンピックにおける柔道の強化合宿における監督による「体罰」が問題になっている。この問題は、高校のバスケット部のキャプテンが顧問教員の体罰に抗議して、自殺したことにその発端があった。この問題に関して、ヨーロッパではこの種の体罰は無いと報道されていた。確かに、現在のヨーロッパの体育界では見られないかも知れない。しかし、ヨーロッパにおける昔の小説や映画を見ると、鞭で叩くといった体罰は、しばしばヨーロッパの学校や寄宿舎において見られたのも事実である。筆者は、度の過ぎる「体罰」には、言うまでもなく反対であるが、幼稚園児や小学校低学年の生徒には、「痛みを与えることによる倫理教育」は必要だと考えている。とはいえ、「痛みを与えること」は、子どもになんらかの「体罰」を与えること

になるので、これは教師というよりは、本来家庭で両親が実施すべき「倫理教育」であると言うべきであろう。家庭教育の基本を、すべて学校に任せている両親に大きな責任があると言わねばならない。しかしながら、学校側でもこの問題を避けて通ることはできない。そこで、筆者は、以前「警策の勧め」を提案した。その結論は、次のようなものであった。

体罰は、最大限思春期が始まりかける10歳頃までが有効であると思われる。それ以降は、「我」が形成され始めて、素直には先生の言うことを聞かなくなるし、体も結構大きくなって、実力行使に出たとき、必ずしも先生が生徒に勝てる状況にあるとは限らない。躰は、大人が子どもに対して、肉体的に圧倒的な優位にある時に、教えなくてはならない。そして、この躰の伝授には、肉体的苦痛を伴わせることが肝腎である。

筆者も、中学校・高等学校における体罰には反対である。しかしながら、家庭における躰が身につけていない場合、教師は、どうしても学校で基本的な躰・道徳を教えざるをえない。とはいえ、それも小学校低学年までが限界である。それ以降に躰・道徳の基本を教えることは、至難の業である。小学校低学年において躰・道徳の基本を教える際には、体罰の代わりに、禅寺の修業で用いられている「警策」(きょうさく)を導入することを提案する。しかも、この警策を小学生に加えるときには、次の条件を前提とする。

1. 先生が、生徒のどこが悪かったのか、その生徒ならびに学級の生徒に説明する。
2. 先生は、「この生徒が立派な人間に成長するために、警策を加えます」と、口頭で宣言する。この手続きによって、先生の怒りの感情は、いくぶんなりとも和らげられる。
3. 警策は、ある程度の苦痛を加えるように、肩に与える。教師になるためには、この警策の与え方の講習を必修科目とする。

光市の事件のように、他人の妻と子どもを自分の情欲のために殺害し、なんの反省もないような極悪犯罪者には、「それ以上の犯罪を犯して人生を台無しにする前に、死刑に処して、それ以上の犯罪をさせないようにしてあげることも、人間としての慈愛(Compassion)であること」を理解しなければならないであろう。²⁴

『食卓よ食事の準備』という童話において、家庭内では、継母のシンボルに相当する「気まぐれで、放浪癖を持ち、欲情に駆られて不貞を働く」雌ヤギは、通常弱いと見なされるミツバチによって処罰された。また、長男の宝「食卓」と次男の宝「金貨ロバ」を奪った貪欲な宿屋の主は、三男の宝「棍棒」によって処罰された。この貪欲な宿屋の主は、ある意味において「社会の悪・欺瞞」のシンボルとも言える。この社会の寄生虫とも言える悪党が適切に処罰されることによって社会、延いては国家も安寧を保つことができるのである。たとえ国民が、「食卓」と「金貨ロバ」が象徴的に表している「衣食住」に恵まれているにしても、そこに正義が存在しなければ、国家は早晚崩壊する運

²⁴ 拙論「体罰に代わる教育手段としての警策」、鹿児島大学法文学部紀要「人文学科論集」第65号所収、2007年、[109-154ページ]、137ページ。

命にある。やはり、世界の平和にとって、「食卓」と「金貨ロバ」も重要であるが、しかしそれ以上に重要な要因は、「正義と秩序を回復する棍棒」であると結論づけられる。

世界には、平気で嘘をつく国家、他国の国民・財産を奪って、なんの良心の呵責も覚えない国家が存在する。こうした状況下にあっては、人々が真剣に「棍棒よ袋から出ろ！」と祈れば、必ずや棍棒が「自然界から」飛び出して、その国家を懲らしめるであろう。その天罰は、自然災害という形ばかりではなく、歴史的に見て過去に何度か世界を襲ったペストのような疫病の形で出て来るかも知れないし、起こって欲しくないと思うばかりであるが、地軸の交替という形で現れる可能性もある。ただし、天罰を求めるその祈りは、通常濫用される危険性は無いと言ってよい。なぜというに、その祈りの源に良心が無い場合には、棍棒は動き始めないからである。つまり、人々の心の奥底に潜む良心があって初めて、それが宇宙のリズムと共鳴し、さらに大きな宇宙のリズムをもたらし、このリズムが調和を求めて、自然界に地震や津波、異常気象を引き起こすからである。家庭における掃除や食事の準備という日常的な仕事が、天界では自然現象と結び付くという洞察は、すでに『ホレばあさん』において提示されている。²⁵

自然の営みと言ったとき、当然のことながらそれは、単に地球の営みばかりではなく、太陽系の営み、銀河系の営み、そして最終的には、大宇宙の営みそのものをも指すことになる。それぞれの営みは一見異なっているように見えはするものの、間違いなく同じ原理に基づいているものと考えられる。古来から宇宙のことを「コスモス」(Kosmos)と呼んできたその厳然たる事実は、やはり、宇宙を「秩序と調和のある大系」²⁶と把握する宇宙観が存在していた証拠でもある。

今ここで、このような宇宙観を受け入れるとすれば、興味深い推論が可能となるであろう。つまり、地球が太陽系・銀河系・大宇宙の秩序と同じ秩序に基づいているとすれば、その地球の上に住む個々の人間も、それぞれ同じ大宇宙の秩序に基づいていると考えられる。それゆえ、宇宙の中の惑星の爆発、流れ星など、宇宙の大異変も、同じ原理に基づいている。従ってここには、不調和や間違いを正して、必然的に元通りに復元する「棍棒の力」が働いていると結論づけられるのである。

²⁵ 拙著『童話を読み解く』、前掲書、449-454ページ参照。

²⁶ Vgl. *Der große Duden*. Band 7. Mannheim/Wien/Zürich (Bibliographisches Institut) 1963, S. 362f.